

茶の湯の歴史と座敷飾り

日本における茶の歴史は、栄西えいさいぜんし禅師が平安時代末期に中国から持ち帰ったお茶の木を明恵上人みょうえしやうにんに送り、それを植えたのが日本でのお茶の栽培さいばいのはじまりとされています。

鎌倉時代かまくら末期頃から、武家や公家くげ そうりよ・僧侶などの間で、各産地のお茶を飲み優劣ゆうれつを競う「闘茶とうちや」が盛んとなりました。

室町時代むろまち、書院造しやういんづくりの建物が生まれると、部屋には座敷飾りとして中国から渡来とらいした美術品である唐物からものを飾り、それを用いてお茶を飲む様式が武家文化に定着しました。

一方で、室町時代中期以降には、小さな座敷かに掛け軸かくと花を生け、客に茶たを点ててもてなす様式が確立し、その後、千利休等せんりのきゆうによって「侘茶わびちや」が大成たいせいされました。

江戸時代には、両方の様式が引き継がれる中で、多くの流派だいまようが生まれ、これまで大名など武士のたしなみであった茶道が、町人文化として受け入れられていきました。